うなぎ

◉ エルフ・セカンダース

「きたっ！　きたーっ！」

羽田さんが、釣竿のある場所まですっとんでいった。目の前に広がる海のような大河と、黄昏（たそがれ）の朱に染まった天空は、万象の息吹を感じさせている。

「うなぎですか、ハダさんっ！」

私も羽田さんの側により、彼がリールを巻いている姿を目で追った。「おっ、かなりでかいぞっ！」と、いいながら羽田さんが竿を左右に振って腕に力を込めている。やがて、トックリ大の太さの、見事な天然うなぎが姿を現した。羽田さんは満足げな表情を浮かべている。うなぎは落日の陽光を浴びて、竿先でうねうねと体をくねらせていた。

「こりゃあ、八〇センチクラスですよっ、さすがハダさんですねっ！」

羽田さんはにやりと笑いながら、慣れた手つきでうなぎをクーラーの中に入れた。

「今日、最初のうなぎだ。しかも、これだけのビッグサイズは久し振りだな」

羽田さんも私も、クーラーの中でゆったりと泳ぐ大うなぎを微笑みながら見ていた。

「いいなあ、揖斐（いび）川の天然うなぎか。しかもこれだけ大きいと、かば焼きにしたら三人前はゆうにありますね」

ここは三重県桑名市――長大な揖斐川の河口――同規模の大河、長良川と合流した広い河口エリア――。

ここの川幅はゆうに1キロはあるだろうか。海が近いため、黒鯛やキチヌ、コチ、セイゴ、マダカ、スズキ釣りのメッカで時にはコイ、フナ、ウグイなどの淡水魚も釣れる。更に四月から六月にかけては、幻といわれるサツキマスが釣れることもある。（私はまだ、釣ったことはないが……）

そして、五月からはうなぎ釣りの最高のポイントとなる。

私がここでうなぎ釣りを始めてから二年の歳月が経つ。揖斐川の堤（つつみ）は、外堤防からそのまま車で河岸堤に降りて、すぐに竿を出して釣ることができる。しかも堤の長さは二キロ以上もあり多くの釣り人を収容することができる。川沿いに車を横付けにして釣りを楽しめるため、重たい道具を抱えて移動する必要もないし、雨が降ってきても車の中に入れば濡れる心配もない。

このフィールドが人気スポットなのは、車で来て手軽に釣りを楽しめる、という理由があるからだ。

ここで私は、〝羽田さん〟という釣友と知り合った。羽田さんは六十二歳、私は四十五歳。

――彼はうなぎ釣りに関しては六年のキャリアで、彼からうなぎ釣りのノウハウを教えてもらった。しかも羽田さんには、人を惹(ひ)きつける不思議な魅力があるのだ。それからというもの私は、釣友の羽田さんと一緒に、毎日のように揖斐川河口で釣りをいそしんでいた。投げ竿を三本から四本立てて、先端に鈴と蛍光器(ケミホタル)をつけ、鈴が鳴るのをひたすら待つ。その間は羽田さんと談笑をしたり、ひとりの時は星空をながめたり夜景を見て心を洗浄する。普段、都会の煩雑(はんざつ)としたビル街にいる私にとっては、この瞬間が嬉しくてたまらないのだ。

ここに来る釣り人は、うなぎや黒鯛が目当てだが、夕方から夜の十時まで釣っていても、大物が二本あがればいい方だ。――だが、それぐらいの釣果でいいのだ。そんなに多くの魚を釣ってもしかたがない。釣りの最大の目的は、この壮麗な自然と己を一体化することにあるのだ。

空の色が紫を帯びた群青色に変わり、一番星の光が見えはじめた。その中を悠然と雲が流れていく。東の地平線に流れ星が刹那(せつな)の光跡を残した。

伊勢湾岸を埋め尽くす、コンビナートや都市の反射光が雲を琥珀(こはく)色に変えていた。大河にかかる湾岸高速の巨大ブリッジ――その上を、蛍のように無数のヘッドライトが流れていく。そして対岸には、中部圏最大の巨大遊園地があり、観覧車やジェットコースターがライトアップの光で、不夜城のように浮かび上がっていた。

ここにくると、人間社会のわずらわしさや悩み事など、いっぺんに吹き飛んでしまう。

悠久の大河と、雲と星が織りなす天球、その中に浮かぶ人間世界の栄華――そう、まさにここは、清爽な自然と文明が調和したシャングリラなのだ。

「ハダさん、この素晴らしい瞬間を体感していると、本当に夢のようですねー」

羽田さんはリクライニングチェアーに座り、ゆったりと煙草をふかしている。

「そうだねー、ここに来ると、自分がきれいに洗い流されていくような気がするねー」

あれから、ふたりの竿はなかなか鈴が鳴らない。まあ、ここでは珍しくもない光景だ。

「釣りって本当にいいですね〜。自然との対話というか、童心に帰るというか、心

が純粋な気持ちになれるんですよね」
私は、少年時代――夏休みの出来事を想いだしていた。
『あした、カブトムシを捕りに行くぞーっ』
と、仲間と約束をかわした。その晩は心が躍って眠れなかった気がする――
釣り、というのは、まさにあのときのワクワクした心情に、タイム・ワープするのだ。
「いやあ、本当にそのとおりだ。私もこんなに夢中になるなんて、思いもしなかったよ」
羽田さんはそういうと、子供のような純朴な笑みを浮かべた。その清々しい風貌は、還暦を越えたとは思えないほどの若さと精悍（せいかん）さを湛えている。
「ははは……、私はねー、いろいろな釣りをやってきたけど、ここでこうしてうなぎ釣りをしている、このひと時が……いちばん好きなんだよ」
羽田さんは、過去に様々な釣りを体験している。船釣りはもちろんのこと、いかだ釣りや磯釣りも経験しているベテランだ。自前のクルーザーを所有していた当時は、伊勢湾沖の方々に船を走らせ、真鯛やヒラマサ、シイラ、アジ、カンパチなど旬の釣りに精通した猛者（もさ）でもあるのだ。
その羽田さんが、おかっぱり（陸からの釣り）を、今は最高の釣りだと豪語している。羽田さんはいっている――。そんなに多くの魚を釣っても面白くない、と……。
それで生計を立てている漁師なら話は別だが、素人が多くの魚を釣っても何の得があるというのか？　だいたい、自然を楽しむためにあるのが釣りなのだ。釣りとは、魚の数やサイズを競う競技ではない。自然の恩恵に謝し、己の心を浄化させるためにある、と……。
「私はねー、ここでうなぎを釣ることを覚えて、待つ――楽しみを知ったんだよ」
「待つ……楽しみ、ですか……」
羽田さんはニヤリと笑い夜空を見上げた。わた飴のような雲がゆっくりと流れていた。
「私はいままで、攻めの人生を過ごしてきた。事業にしても、プライベートでもそうだった。常に先手を打つような経営戦略こそ、この厳しい競争社会を生きぬく秘訣だと思っていたんだよ……」羽田さんはそういうと、名残惜しそうに煙草の煙を吐きだした。「実際、人間の社会はそういった要素も必要だし、私も経営者としていい時代を過ごしてきたが……」羽田さんの眼は夜空の彼方を見ていたが、その双（そう）

眸は己の半生を見ているかのようだ。
羽田さんは、若い頃から某大手自動車製造会社の技術者として名を馳せていた。モータースポーツ界の黎明期から開発、発展のプロジェクトに携わり、レーシング産業の礎を築き上げてきたのが彼なのだ。
その後、彼は独立して会社を立ち上げた。彼の人並みはずれた先見の眼と辣腕経営、人心掌握術により、会社は成功を収め、短期間でみるみる業績を伸ばしていく。
そんな絶頂期の時代もあったが、人生そんなにいいことばかりではない。
それはまさに晴天の霹靂――凶事が彼を襲った。
彼の、最愛の妻が不治の病にかかったのだ。羽田さんは、愛する妻の治療に己のすべてをなげうった――。そして、己の会社さえも人手に渡した。
数年後――奥様が他界し、羽田さんの私生活も落ち着くと、三重県から過去の偉大な業績をかわれて、地域活性化推進の顧問を依頼される。羽田さんは、過疎化してゆく町興し対策を一任され、そして彼の企画力、行動力、統率力は期待以上の実績をあげていく。
やがてその名声が全国にとどろき、現在は国の依頼を受けて、講演活動や地域開発事業の相談役として現役で活躍している。そして、その合間をぬって、うなぎ釣りをしながら、悠々自適に人生を謳歌しているのである。
「待つ……ということは、人が、この自然と時を合わせることなんだよ……。急いで人生を駆け抜けてきた私にとっては、それは、本当に素晴らしいことなんだ……。この瞬間が、珠玉のような大切なひとときだと、思えてならないんだよ……」
羽田さんはそういうと、眼前の港夜景を見ていた。その表情には、一片のかげりもない。
「なんだか、僕にもわかるような気がします……。僕も、都会の中で仕事をしていると、たまらなくここに来たくなるんですよ。まるで、懐かしい友達に会えるような、汚れのないあの頃の自分に……戻れるような気がするんです……」
羽田さんは相好を崩すと、マイカーの中からポットを持ってきて、紙コップにお手製のコーヒーを注いでくれた。
「ごちそうになります、ハダさん」
羽田さんが創ったコーヒーは、豆をひいた本格的なコーヒーだ。それを私に振る

舞ってくれるのだ。その味はとてもまろやかで美味しい。私はお返しとばかりに、車の中からスナック菓子を取り出し、テーブル代わりのクーラーに置いた。

「しかし……、あれからなかなかアタリがこないなあ」

羽田さんがコーヒーを口に運びながらそういった。羽田さんが大うなぎを釣って以来、かれこれ二時間以上になる。時刻はもう、夜の八時を越えていた。それからというもの、アタリらしいアタリはこない。餌はカメジャコという河口近辺に生息する、エビガニのような餌だ。この河口釣りでは欠かせない必須アイテムだ。小さなセイゴまで釣れる万能アオイソメとは違い、カメジャコは、うなぎはもちろんのこと、黒鯛やマダカ、スズキクラスの大物だけが釣れる重宝な餌でもあるからだ。ただし、厄介な外道もくるが……。

「おおっ、オグちゃん、来たぞっ！」

私の愛称を叫びながら、羽田さんが興奮した表情で私の後方を見た。私は思わず自分の竿に目を向けた。すると、二番竿が大きくしなっている。

「やったっ」

私は急いで自分の竿に駆け寄った。しかし、竿先が大きく引っ張られ三脚から倒れた瞬間、私は落胆の表情になった。羽田さんの声が背後から響いてくる。

「あーっ、エイだ……」

私はその言葉に顔をしかめながら倒れた竿を手に取り、リールを巻き上げた。そしてそのまま護岸ブロックを下りていった。間違いない、この感触はアカエイだ。しかも、かなり大きい……。エイの特徴は、竿が大きく倒れるほどの引きがある。だから竿が倒れた時点でエイが釣れたとわかるのだ。ほったらかしにしておけば、そのまま竿ごと持っていかれる恐れもある。ここにいるアングラーは、過去、何度エイに高価な竿を持っていかれたことか……。先述した――厄介な外道――というのは、このアカエイのことなのだ。

私は慣れ親しんだ引きを感じながら苦笑いの声を出した。

「しかたないですよ、これも釣りですから……。いつも楽しい釣りとは限りませんよ」

アカエイを釣り上げるのには相当の体力がいる。それが大物なら尚更だ。私は、まるで濡れたフトンを引きずっているかのような重みを感じリールを巻いていた。やがて獲物が間近に迫ると、羽田さんが側まで来て私に尋ねた。

「どうする？　オモリだけ残れば充分か？」
私は思わずうなずいた。河口（ここ）の釣りでは、それが暗黙の了解なのだ。アカエイは基本的に食える魚だ。椀物や煮つけにすれば結構いける魚なのだが、ここでの釣り師はほとんどエイを釣り上げない。なぜか？　というと尻尾に強力な毒針があるからだ。万が一刺された場合、猛烈な痛みを感じて、釣りどころではなくなるらしい。すぐに病院に直行だ。そんな思いをするくらいなら仕掛けごと切ってしまえ、というのが本音なのだろう。アカエイには、少し申し訳ない気がするが……。
やがて、水面に八〇センチはあろうか、という特大ピザのようなアカエイが姿を見せた。羽田さんが慣れた手つきでハリスを切った。アカエイは、ゆっくりと水の底に消えた。
「まいったな……。今日、初めての大きなアタリだったのに……」
アカエイは上げ潮と共に、河口から五キロくらいまで河に登ってくる。集団で群れをなしていることが多く一匹釣れはじめると続けて釣れることが多い。『げえーっ、またまたボスタングかっ！』と、一日中アカエイしか釣れないこともあり、仕掛けが次々と無くなっていく日もある。まさにお呼びでない、という外道なのだ。
「エイの食わないカメジャコがあればいいのに……」
私はそうぼやきながら、新しい仕掛けをオモリに付けていた。餌箱を見ると、カメジャコの数が半分まで減っている。うなぎは意外と賢く、器用に餌のカメジャコだけをさらっていく。竿先が動き、うなぎがかかったと思っても、すぐにリールを巻いてはならない。うなぎは何度も餌を吐き出して、針がついていないことを確かめているのだ。だから、うなぎ釣りの極意としては、竿先が大きく三度傾いてから、ようやくリールを巻き上げるのがコツなのだ。それでも、餌だけを盗られていることが再三である。
だから、我々に釣り上げられるうなぎは少々オバカである。裏を返せば、それは汚れの無い純粋な、愛すべきうなぎ様なのだ。
だから、釣り上げたときの喜びもひとしお大きく、我々はその愛すべきうなぎ様に感謝し、この大河に深謝し、大自然の恩恵に万謝し、最後はかば焼きにして美味しく食べてあげなくてはならない。
あ～、ここはうなぎ天国である。

「うなぎ釣りの醍醐味はね、なかなか釣れないことなんだよ。しかし、その分いろいろなことを考えたり、自然の雄大さを感じたりする瞬間を……味わうことができるのさ」

天空で、またひとつ流星がはしった。その光跡を追いかけるように、飛行機の点滅灯が夜空を横切っていく。

「僕もいつのまにか、ハダさんの影響を受けて、うなぎ釣りがメインになりましたよ」

「そりゃあ、黒鯛やセイゴもいいけれど、うなぎの魅力にはかなわないよ」

――私は羽田さんと初めて会ったときのことを思いだしていた。

『私はねー、ここでうなぎを釣るのが楽しみなんだよ。私にとっては、うなぎ以外の魚は黒鯛であろうと、スズキであろうと、外道みたいなものだよ』

私はその言葉を聞いてびっくりした。黒鯛やスズキといえば、釣り師の王道である。黒鯛釣りはチヌ道といい、チヌ専門に釣っている釣り師もいるくらいだ。スズキはルアーの対象魚としてシーバスともいわれ、八〇センチ越えのランカーシーバスは、ルアーフィッシングの憧れの的だ。その二大巨頭を、いとも簡単に外道だといいのける人物に驚愕したのだ。

『私は、真鯛やハタ、カジキも釣ってきた男だからね。ただ単に大きな魚を釣る、というよりも、なかなか釣れない魚がいいんだよ』

実際、羽田さんが五〇センチオーバーの黒鯛を釣っても、その釣った大物を惜しげもなく私にくれるのだ。羽田さんはそのとき笑いながらこういった。

『よかったら持っていけよ。私は、黒鯛はもう食い飽きた。うなぎ以外はもういいよ』

私は当初、ここに来た目的は、大きな黒鯛やマダカ、スズキを釣ることであった。うなぎなど自分でさばけないし、乱獲により漁獲量が減少し、希少種になりかけている魚である。私は、ここでこれだけの人間がうなぎを釣っていることに、最初は懸念をいだいたのである。

（あの、おいしいうなぎが絶滅したら、どーすんねん……）

しかし、ここで釣りをしているうちに、私の考えは大きな過ちだとわかった。

一日かけても、うなぎが上がるのは多くて三匹くらいなものだ。ほとんど一匹か二匹釣れる程度である。しかも、そう簡単にうなぎは釣れる訳ではない。たいがいはボウズの日になるのが常なのだ。十回連続でボウズのときもあった。ひと月に二

匹しか釣れないこともあった。更には、カメジャコなどの餌は、大半、タダ食いされていく。しかも小さなうなぎはリリースするのが常識であり、余った餌を河に捨てることで、小魚や甲殻類の繁殖に貢献していることになる。そして、その小生物をうなぎが捕食している。つまり、ここでは多くのうなぎを釣り人が養っている、ともいえるのだ。

大多数の科学者がいっているように、世界的に魚が減っている大きな原因は、人間が海を汚しているからなのだ。公害や大気汚染、違法投棄、油の流出や開発計画による土砂の流入……。人間は過去において、当たり前のように不必要なものは海に捨てればいい、という愚かな手段をとってきた――。

広範囲に及ぶ海洋汚染、水質の汚濁が世界中の海で自然の生態系に悪影響を及ぼしている。特にゴミベルトといわれる海域では、海に流れ着いた大量のプラスティックゴミにより、海洋生物が危機にさらされている。海中に溶けたプラスティック分子（ＢＰＡなど）は、今やプランクトンの数より多い、といわれているのだ。その結果、大型の捕食生物だけではなく、小さな魚から多種多様な魚貝類の体内にそれが蓄積され、最終的には人間の腹の中に行き着くことにもなる。人間の中のＢＰＡ濃度が高くなれば、成人病の危険性が高くなり、機能障害を持つ新生児の発生率も高くなる。つまり、人間が起こした海洋汚染のツケは、最終的に人間が支払っていかなければならないのである。

勘違いしないでほしい。これは魚を食べるな、魚は危険だ、といっているのではない。

ＢＰＡなどのプラスチィック粒子は、ペットボトルの飲料水、プラスティック容器の食品、レトルト食品、ビニール包装品すべてにその分子が微量に入っていて食材に付着しているのである。更には人工栽培された青果類、人工管理の中で成育した家畜類にも化学分子が微量に存在している。――私が強調したいのは、そういった人工化学粒子が自然界に溶け込むことに対しての危険性を、人間が理解し行動しなくてはならない、ということだ。

だから、釣りに来てゴミを海に捨てる、などということはもってのほかなのだ。

うなぎがマリアナ海溝近辺の深海で産卵することは知られている。そこでうなぎの卵が孵化し、何千キロという海を渡ってアジア沿岸の河川にたどり着くのである。海が汚染されると、抵抗力の弱い稚魚がまっさきに影響を受ける。うなぎの稚魚、

シラスウナギの量が減っているのは、そういった海洋汚染が原因となっている可能性が高い。

だいたい日本人が、異常にうなぎやマグロ、海産物を消費しすぎるのも、それに一役かっている。私も魚は大好物で、自分で自分を責めることになるが、以前はそれほど口にしなかった高級魚も、いまは安価で購入することができる。本来はバランスよく野菜を中心にカロリー摂取することが望まれるのであろうが、これだけ物が余っている現代では、つい、己の好物を中心に偏食してしまう傾向がある。私も反省しなくてはならない。

だから世界中の漁師たちが、外貨獲得のために大量に魚を乱獲するようになったのだ。富裕国のエゴが、全世界規模で地球の営みに負の影響を与えているのだ。それが、海産物の減少に拍車をかけているのだ。我々、釣り人のせいではない。つまるところ、全世界規模で漁獲生産高が減少しているのは、人類が築き上げてきた虚飾文明の軽挙妄動（けいきょもうどう）が起因している、ということなのだ。

むかしからいうように、釣り、というのは漁場を豊かにするものである。

必要以上に魚を獲ったり、悪質な漁法をしたり、ゴミなどを投棄せずにマナーとモラルを持って、環境を大切に守っていれば、釣りは自然と融合した人間の愛すべきレジャーのひとつなのだ。

「何を釣っているんですか？」

若い男の声が聞こえてきた。振り向くとそこには、二十代前半と見受けられるカップルの姿があった。彼氏は全身に光物の装飾をつけた今時のイケメンである。彼女の方もナゴヤロール、といわれるロングヘアーをなびかせたかわいらしい子だ。

「うなぎだよ」

私がそういうと、彼氏が「へえー」といいながら興味深そうな顔になった。

「釣れましたか？」

私が微笑を浮かべ隣の羽田さんを見ると、羽田さんが嬉しそうな顔で「見るかい？」といいながらクーラーに手をかけた。

「ええ、是非っ」

と、彼氏がいうと羽田さんはクーラーの蓋（ふた）をあけて、中にいる大うなぎを見せた。

「で、でけえっ！」

「あ、あたし、こんな大きなうなぎ見るの初めてっ！」
と、ふたりとも感嘆の声をあげた。
ここでカップルの来客があるのは、そう珍しいことではない。河口の港夜景を見るために、車で訪れて散策する人たちが結構いるのだ。
恋人同士や友人仲間でここに来て、星空の下、夜通し語り合っていることもある。それが会社への雑言や上司批判、同僚の悪口だと、聞いているこっちも結構おもしろい。
――『だいたい、あのアホ部長が知識もねえのに、思いつきでくだらねえ意見をいうから、こんなバカな制度ができあがるんだよっ、まったく！』
『そうだよ、なんで現場の意見がいっつもムシされるんだよ！　おまえら机の上でふんぞりかえって、上にゴマすっているだけじゃねえかっ、バカヤロウ！』
なるほど……。どこの会社でも、サラリーマンの憤懣（ふんまん）は一緒だな……。それに、上司っていうのは、どんな職場でも憎まれ役なんだな……。
中には女同士の愚痴っていうのも、普段聞けない話が多いからおもしろい。
『あの受付の女、バッカじゃないのっ、――だってさ、この間さ、お客さんに開発システム部は何階ですか、って聞かれて、六階でございますって……、うちのビルは五階までしかねーだろっ』
『営業一課に入った、あの、厚化粧の新人女もバカだよ。お客さんから電話を受けてさ、――田中はふたりおりますが、どちらでしょうか？　――ああ、頭の薄い太った方ですね――だって。笑っちゃうよね』
たぶん……あんたらも、よそで同じようなことをいわれているだろうよ。
そういうわけで、釣りをやっていても、様々な人と出会ったり、愉快な釣友ができたり、現代の人間模様を見ることができたりと、退屈させられることはない。特にこの素晴らしい空間では……。
カップルが立ち去ってしばらくすると、黒のワンボックスカーがやってきて、我々の前で停まった。
「おお、釣れとるけえ！」
年配の頑丈そうな体躯の男が、車から降りてきて大きな声でいった。
「ハシやんか、さっき大きいのが一本あがったよ」

羽田さんが、親しみを込めた表情で男を迎えた。
「ほう、どれどれ……」
通称ハシやん――同じうなぎ釣り仲間の橋口さんだ。年齢は、おそらく羽田さんと同じ六十歳をやや越えたとこだろう。しかし、筋肉質の体型からは、まだまだ若い者には負けん、という力強さが伝わってくる。
「おお、こりゃあデカだ、先週、俺が釣ったやつよりもでけえなっ」
ハシやんは、人なつっこい笑みを湛えてクーラーの大うなぎを見ていた。
「今日はいつもよりずいぶん遅かったな。ハシやん、何かあったのか？」
羽田さんの言葉に、ハシやんは残念そうに小さく眉を顰めた。まるで、遊び時間に遅れて来たガキ大将のようだ。
「おう、そうだよ。今日は珍しく大きな仕事があって、こんな時間になっちまった」
彼は、この場所でのうなぎ釣りは十年以上のベテランだ。羽田さんも、ハシやんからうなぎ釣りの手ほどきを受けているし、私にとっても彼は釣りの先生だ。
――とにかく橋口さんのライフスタイルがすごい。
週に五回は、ここでうなぎ釣りに来ているが、そのうち最低三日間は、この堤で泊り込むのだ。彼のワンボックスは、運転席から後ろのスペースは畳敷きになっており、ちょっとした住まいになっている。ふとんが常時置いてあり小さな簡易トイレもついている。簡単な料理なら作ることもできるし、壁の一角にはお酒のボトルがきれいに並べてある。夜通し釣るときは、ここで一杯やりながら憩いのひと時を過ごすのだそうだ。
（あ～、まるで夢のような生活だ……）
仕事は小規模の電気工務店を経営しており、社長でもあるハシやんは、半分隠居のような待遇で、仕事のほうはもっぱら若手社員に任せてある。それでも大きな仕事が入ったときは彼自身も顔を出さない訳にはいかず、今日は仕事をしてからのおかっぱりタイムだそうだ。家もここから二キロほどの場所にあるのだが、家に戻るときは釣った魚をさばき、かば焼きにして家族に振る舞う時だけだ。それが終わったら少し寝て、餌を仕込んではまたここに来るのだ。――彼の名誉のためにいっておくが、別に家にいるのがイヤな訳でもなく、夫婦仲がうまくいっていない訳でもない。彼は、純粋にうなぎ釣りが好きなだけなのだ。家族の方も、もうそれに慣れてしまっているから何もいわないそうだ。

うなぎ釣りは五月くらいから始まり、だいたい十月いっぱいで終わる。しかし、ハシやんは、十二月までここでうなぎ釣りをしている。彼の話だと、過去に釣れた最終釣果は、十二月三十日に釣れたこともあるそうだ。つまり、一年のうち八ヵ月をこの揖斐川の堤で過ごすのである。

（まーっ、なんとうらやましいことかっ！）

私は、ハシやんのフィッシングライフに、心底あこがれずにはいられなかった。

私も将来、余暇ができたならば、キャンピングカーを手に入れて、是非、彼のような生き方をしてみたい。それは、釣り師にとっては、正に夢のようなライフスタイルなのだ。桃源郷といってもいいだろう。

うなぎや釣りに興味が無い人にとっては、何がおもしろくてそんな生活をしているのか、ということになろう。まるで世捨て人かホームレス、あるいは無人島生活にあこがれる現実逃避主義の偏屈野郎と見えるかもしれない。

しかし、私にとっては、それは何にも縛られることのない最高のライフスタイルであり、仙人のような自由人（フリーマン）の印象を受けるのだ。

「羽田さんはもうそろそろ終わる頃だろ、その前にこれを食っていけよ、うなぎの押し鮨を作ったんだ」

ハシやんは笹の包みを開けて、私たちの前に差し出した。そこには、美味しそうな白焼きの押し鮨が香ばしい匂いを出していた。

「オグちゃんも食えよ、先週釣ったデカで作ったんだ」

私は先週の出来事を思い出していた。そういえば、ハシやんは七〇センチクラスの大うなぎを釣り上げて満足していた。ちなみにうなぎは、釣ってもすぐに食べられる訳ではない。最低三日間は、真水で泥を吐かしてからさばいた方が美味いのだ。だから私も、家にうなぎ専用の水槽をひとつ用意してある。そこできれいな水の中で三日から一週間ほど生かしておいてから、かば焼きにするのだ。

（これが先週釣った、あのデカうなぎか……）

私も羽田さんも、ハシやんの心づくしを堪能した。素人が作ったとは思えないほどの出来栄えだ。ハシやんのレシピは、うなぎを白焼きにして、あえてタレはかけずに甘塩と柚子の素朴な調味料を適度にまぶしてやる。これがまた、酢飯との相性がピッタリなのだ。

羽田さんも私も絶賛の声をあげた。

「さすがハシやんだね、こいつは料亭に出しても断然いけるよ」
「これはうまいっすね。うなぎは白焼きの方がうまいって、つうの人はいいますけど、本当ですねっ」
ハシやんは、上機嫌で缶ビールを飲んだ。どうやら、今夜もここで泊まるらしい。
「オグちゃんは、今夜何時までやっていくんだ？」
「明日は休みなので、四時くらいまで……」
私がそういうと、ハシやんはたまらない、というような笑みを浮かべ、車のボトル陳列棚から、難しい字で書かれた日本酒のビンを出した。
「明け方の四時なら、いま呑んでも大丈夫だろ。この酒は秋田の地酒だ、うまいぞーっ」
と、いって紙コップに日本酒を注いだ。私は照れながらお酒を受け取った。こう見えても私は結構いける口で、しかも日本酒は大の好物だ。
しかし、お酒というのは、本当は釣りでは御法度なのだ。フィールドで飲酒するのは私の主義に反するし、大物魚が釣れたときポカをして逃がしてしまう可能性もある。また、酔っていると誤って足を踏み外し河に落ちる恐れもある。
――だが、相手が大切な釣り友でもあるし、ハシやんのような人生の先輩でもあり釣りの先生ならば、断る訳にはいかない……。
（うーん、難しい選択だが、ここは橋口さんを立てないといけないし……）
良い子のみんなは、危険だから絶対に、釣りにのときにお酒は飲んではならない。救命胴着も忘れるなっ。
「いやーっ、うまいっすねーっ」
と、たまらずに呑んでしまう自分が少し情けなくもある。（まあ、紙コップ一杯くらいなら、全然大丈夫だから……）と、我が身を甘やかせてしまう自分が少し後ろめたい……。
「んじゃあ、ハシやん、オグちゃん、またね！」
九時を少し越えた頃に、羽田さんは納竿（のうかん）する。
これが羽田さんのフィッシングスタイルなのだ。だいたい午後三時くらいから釣糸をたれて、夜の九時を越えたところで帰途につくのだ。羽田さんは日の明るいうちから来るので、河岸堤は比較的空いている。そこで、私の釣り場所もとっておい

てくれるのだ。そうでなければ、人気の高いこの場所では、良い釣り場を確保できないこともある。

あ〜、ほんまに羽田さんに感謝ですゥ〜。

「また、来週お願いします！　ハダさん！」

羽田さんは運転席から、親指を立ててこぶしをつくった。今日はうなぎ一本だけだったが、超特大サイズだ。羽田さんも上機嫌で帰っていった。

かわりに、羽田さんの釣っていたポジションでハシやんが竿を並べ始める。羽田さんは竿を四本立てるが、ハシやんは六本も立てる。そして、一〇〇、八〇、六〇、四〇、二〇、一〇メートルと、距離感覚をおいて餌を投げ込むのだ。こうすればうなぎだけではなく、黒鯛やスズキが釣れる確率が高まる、という訳だ。ハシやんは私と同じで、うなぎだけでなくチヌなど大物魚も釣果の対象に入っている。ハシやんの餌箱の中にはカメジャコが五十匹以上はいた。これなら、三日分はありそうだ。

「そうか、ここであのデカがきたか……」

ハシやんが、缶ビール片手につぶやいていた。

「橋口さんは、今夜もここでお泊りですか？」

私の問いに、ハシやんは顔を少しゆがめた。

「そうなんだけど、きんのうはあんまり寝てねえし、今日は朝から仕事だっただろ、だからさ、ここでバタンキューしちゃうかもしれねーんだよ」

そういうと、ハシやんは大きなあくびをした。

「だから、十一時くらいになったら、ちょっと仮眠をとりたいんだよ、そのあいだ、オグちゃん、悪ィけど俺の竿、見ててくんねーか？」

私はハシやんの言葉に笑顔で答えた。

「任しといてください、それより、大物がかかったら僕が釣り上げちゃっていいですか？　起こさなくて……」

「いいよ、いいよ、そのまま釣ってくれればいいから……。なんなら、持って帰ってもいいんだぜ」

「いやいや、ちゃんと橋口さんのクーラーに入れておきますよ。それと、五〇センチ以下ならリリースでしたよね。（私なら四〇センチ以下だ。レベルが高い）――それじゃあ眠くなったら、あとは僕に任せてゆっくりと休んでください」

私がそういうと、ハシやんは餌箱からカメジャコを無造作につかんだ。
「悪ィな、オグちゃん――これはおすそ分けだ、使ってくれよ……」
タッパに入った十匹ほどのカメジャコを、私は遠慮がちに受け取った。
「ああ、すいません、こんなにいいんですか？」
「いいよォ、そのかわりエイには気をつけてくれよ。俺はここで、三本も竿を持っていかれてんだ」
私は思わず苦笑した。
「大丈夫です、僕がちゃんと見張っています」
それから――ハシやんと夜空を見上げながら語り合った。
話の大部分は、ハシやんがこの場所で釣り上げた巨大魚の武勇伝である。ランカークラスのスズキを釣るときの極意や、六〇センチオーバーのマゴチを釣ったときの臨場感溢れる話を聞いていると、この場が本当に天国のように思えてくる……。
「俺が、一晩で、黒鯛を七匹釣ったときは……」瞬間、鈴が鳴った。
話の途中でハシやんが突如立ち上がり、ダッシュで竿に駆け寄っていく。
羽田さんもそうだが、いくら会話がはずんでいても、何かに熱中していても、鈴の音が聞こえた刹那（せつな）、脳内すべての回路が遮断される。鈴がチリリン、と鳴った時点で、瞬時に彼らの頭の中はきれいにリセットされ、うなぎが彼らを支配する。おそらく目の前でＵＦＯが降りてきても、彼らにはそれどころではないだろう。
私も慌てて駆け寄った。ハシやんがリールを巻きながら悪戦苦闘している。「タモを持ってきてくれっ！」私はすぐに引き返し、玉網を手にとり護岸ブロックを駆け下りた。すると、水面で見事な黒鯛がヘッドランプに照らされていた。
私が玉網を伸ばし、慎重に黒鯛を取り込むとハシやんは竿を持つ力を緩めた。
それは見事な黒鯛だった。サイズを測ると五四センチ。年なし、といわれる最大級の大物だ。ハシやんも満足そうに煙草を吸っていた。
「すごいや、ハダさんといい、橋口さんといい、今日は大物ばかりだっ！」
「うなぎじゃないのが、ちょっと残念だけどな……。でも、久し振りに気持ちいい引きを楽しめた」
するとハシやんは、車の中から小型の出刃包丁を取り出し、この場で解体をはじめた。黒鯛が見事に三枚におろされると、慣れた手つきで身の部分だけをビニールに入れてクーラーの中に放り込んだ。そして、残ったアラはそのまま河に投げ入れ

る。頭や内臓は小魚やカニの餌になるという訳だ。だから出刃包丁もここでの必需品だ。ハシやんは口癖のように『大物釣りと、銀行に行くときは、デバがいちばんだ』と、オヤジジョークをいう。

「――じゃあ、俺はちょっくら寝るから、あとは頼むよ」

「ええ、ゆっくりと休んでください。四時くらいになったら声をかけますので」

「助かるよ、オグちゃんにも、ドデカうなぎがくるといいな」

ハシやんはそういうと、ワンボックスの中に姿を消した。私は心の中でつぶやいていた。

（いや、ドデカじゃなくても、フツーのうなぎでいいんですけど……）

時刻は、夜の十一時半を指していた。

★

――私は、この、永劫の時の中を佇んでいた。

美しい夜空と港の情景が、私の心を癒していく。

私の体も心も、この空間と融合していた。

美しい自然界の粒子が、私の体を優しく包みこんでいく……。

自分がすべての有機体の意識と同調している……。すべての生命体に支えられて実在している……。それはまるで、ファンタジー映画の主人公のようだ……。

私は、いま――あの、子供の頃の世界にいた……。

夕日を追いかけるように、友達とかけっこをしている。赤く染まった空で、とんぼが鬼ごっこをしていた。コオロギやマツムシが田園のシンフォニーをいっせいに奏で、小川ではメダカたちがラッシュアワーのように競泳していた。

家に近づくと、ママの手作りカレーの匂いが漂ってくる。裸電球の街灯が、遊び時間の終わりを告げるように灯りだした。一番星が、またあした遊ぼうね、とでもいうように輝いている。貨物列車の汽笛が聞こえてくると、僕の足は機関車のように速度を上げた。

そう、何もかもが輝いていたあの頃……。何もかもが、大切だったあの頃……。

魚釣り……。カブトムシ捕り……。ザリガニ、金魚、ミドリガメ、カン蹴り、メンコ、野球、プラモデル、ライダーカード、怪獣ごっこ……。

友達と遊んでいるときが、何にもかえられない夢のような空間だった。

みんなが集まると、そこはもうすでにネバーランドのようだった。
山や森や川……自然の場所に行くと、更にまわりの魚や虫たちが、最高の遊び相手になってくれる。小川に行けば、ザリガニやフナがおもしろいように捕れるし、メダカなんかは、それこそ星の数ほどいた。水草の下にタモを入れると、何百匹というメダカが入ってくる。ドジョウやナマズ、イモリもたくさんいた。デパートに行く必要なんてなかった。
この頃の、ステイタス魚はコイとうなぎだ。この魚は、子供の腕ではなかなか釣れない。だから、仲間の中で誰かが捕獲に成功したら、その子はもうそれだけで、みんなの英雄だった。
小学校四年生の時分、初めてコイを釣り上げたとき、嬉しくて毎日が天国のようだった。水槽に入っているコイを眺めては、自分の世界に入り浸っていた。
田んぼや用水路では、タイコウチやゲンゴロウ、ミズカマキリなどの水生昆虫を捕りにいった。どろんこになってもお構いなしだ。そして、ご褒美の王様は、やはりタガメだ。
森の中に入ると、カブトムシ捕りに夢中になる。また、クワガタやカミキリムシも人気があって、捕れた虫を仲間と見せあって自分の部屋に一大昆虫ワールドを作る。お互いが刺激されると、少しでも珍しい虫をコレクションに加えようと、また森に入ってアドベンチャーを繰り広げるんだ。そして、当時の人気ナンバーワンは、ノコギリクワガタだった。
小学校高学年になると、冒険の対象もグレードが高くなってくる。
魚ではライギョが一番人気となり、モグラやウシガエル、スッポンなどもステイタスとなった。捕獲した珍しい生き物を学校に持って行くと、その子はちょっとしたスターになれるんだ。時にはコウモリがブームを呼び、我先にと、近くの山の洞窟に入ってコウモリを捕りに行った覚えがある。
そんな子供の頃に戻されると、今まで生きてきた半生で、一番純粋に楽しかった瞬間は、やはり子供時代だと思えてくる。
汚れの無いあの頃……。すべてに夢中になっていたあの頃……。
一匹の虫が宝物だった。一匹の魚が自分の誇りだった。そして、友達と野山を駆け回ったあの日々……。何もかもが輝いていた……。
もし、もう一度むかしに戻ることができるのならば、私は、純真無垢なあの頃に

戻りたい……。なぜなら、それが自分の本当の姿だと感じてならないからだ……。

不意に天空の星空から、ひとすじの光が降りてくる幻影をみた。

その光に身をゆだねながら、私は己の半生を振り返っていた。

大人になって覚えたこと……。社会人となって覚えさせられたこと……。

生きるために……、カネを稼ぐために……、地位を得るために……、生活を豊かにするために……、人は多くの尊いものを犠牲にしてきた……。

厳しい競争社会を勝ち抜くためには、自分の心を汚さなくてはならなかった。

人間関係、上下関係、ノルマ、限界、自己保存、ストレス、酒、恋、挫折……。

聖人のように生きるよりも、地位と富と権力を得ることが大切な人間社会……。そんな社会構造に疑問をいだきながらも、機械の歯車のように、人生を過ごしてきた……。

だが、ここにいる瞬間、私は……こう思っている……。

私は、人間の世界で生きているのではない。この、宇宙と、地球と、すべての自然界の一員として、存在している……。

それはなんと深遠で広大なものなのか……。

ありとあらゆる生命の息吹……いや、この世界に存在する物質の、すべての粒子の中に尊い意識が存在する、と思えてならない……。

この自然の世界は、人間が創った世界ではないのだ。人間のエゴがこの地球を汚しているが、人間もこの地球から産まれ出てきた生命のひとつなのだ。人間もはるかなる進化の一部なのだ。そして、我々は泥濘（でいねい）の人間社会から、生命の意義を見つけるために存在しうる尊い生命体なのだ。この地球は、宇宙は、我々人間が更に進化し、この世界の真理を悟ることができる栄（は）えある存在を待っていたのだ。

私は、空を見上げた。

いまから私は、この地球の、宇宙の一員として生きていくのだ。何にもわずらわされる必要はない。社会に振り回される必要もない。何もかもを解き放って生きる……　何もかもを慈（いつく）しんで生きる……　いつも子供のように澄みきった心で生きる……

万物の愛が、いつも私を支えてくれるから……

この世界の、すべての尊い意識が、私を導いてくれるから……

（ああ……、ここは本当に、天国のようだ……）

そのとき、どこかからチリリン、という音が響いてきた……